

## 第IV章 高校教師は生徒をどう指導しているか



前章では、高校教師が現代の高校生をどのように見ているかを分析した。これに対し本章では、教師が生徒の学校生活や進路選択に

どのようにかかわっているかを見ていくことにする。

### 1. 教師の高校教育観

#### (1) 高校教育観の実態

高校教師は高校教育に対して、どのような考えを持っているのだろうか。生徒とのかかわりを見る前に、まず教師の高校教育観に目を向けてみよう。

表Ⅳ-1は、「高校教育についての考え方」を7項目あげ、1「そう思う」、2「どちら

かというと思う」、3「どちらかというとは思わない」、4「そうとは思わない」の4段階で回答を求めた結果である。

「そう思う」と「どちらかというと思う」を加えた数値に注目すると、「文化祭や運動会などを、もっと積極的に奨励すべきだ」と答えた者が74%もおり、他の項目を引き離している。受験戦争の激化がとり沙汰される

昨今にあって、このように多くの教師が学校行事のよさを認めていることは、評価すべきことと思われる。

しかし、全体的な傾向としては「受験勉強は苦しみに耐える忍耐力が身につく」(66%)、「受験勉強でついた能力は、大学での勉学の基礎になる」(63%)といった、受験勉強を肯定する意見が上位を占め、「高校生をおとな扱いし、髪形や服装をもっと自由にすべきだ」(31%)が最下位に甘んじているなど、勉強を推奨する意見が優勢となっている。また「受験のための勉強はむしろ創造力を育てる上で害になる」(50%)と思う教師が半数いる。受験のためのつめこみ勉強に疑問を感じながらも、それを推し進めていかねばならない高校教師のジレンマが表れているといえよう。

生活面について付言すれば、生徒の髪形や服装に自由を認めない教師が約7割いることは特筆すべきである。生徒をあくまでも枠に当てはめようとする教育体制が強いのか、それともそこまで規制しなければ秩序が保たれ

ないほど、高校教育の現場が乱れているのか、いずれにしてもゆゆしき問題である。

こうした教師の考えは、教育を受ける側の高校生の意識と比べるとどうなるのだろうか。高校教育に対する教師と生徒の考え方の差違を示したものが、図Ⅳ-1である。受験勉強については比較データがないため、「文化祭や運動会を奨励」などの4項目について図示した。

これによると「文化祭などを奨励」では、教師の74%がそう思っているのに対し、生徒の側は97%と圧倒的に賛成の意思を表している。同様に「おとな扱いして髪形なども自由に」も、生徒の方が賛成の割合が高くなっている。逆に「学力別クラス編成」や「競争意識をつけさせる」という考えに対しては教師の方が同意する傾向が強い。

教師の調査と生徒(卒業生)の調査とでは、選択肢が異なるため、両調査結果の差として表れた数値そのものにはあまり意味がない。しかし項目ごとの両者の意向ははっきりしていると見てよい。前2項は教師より生徒に後

表Ⅳ-1 高校教育に対する考え

(%)

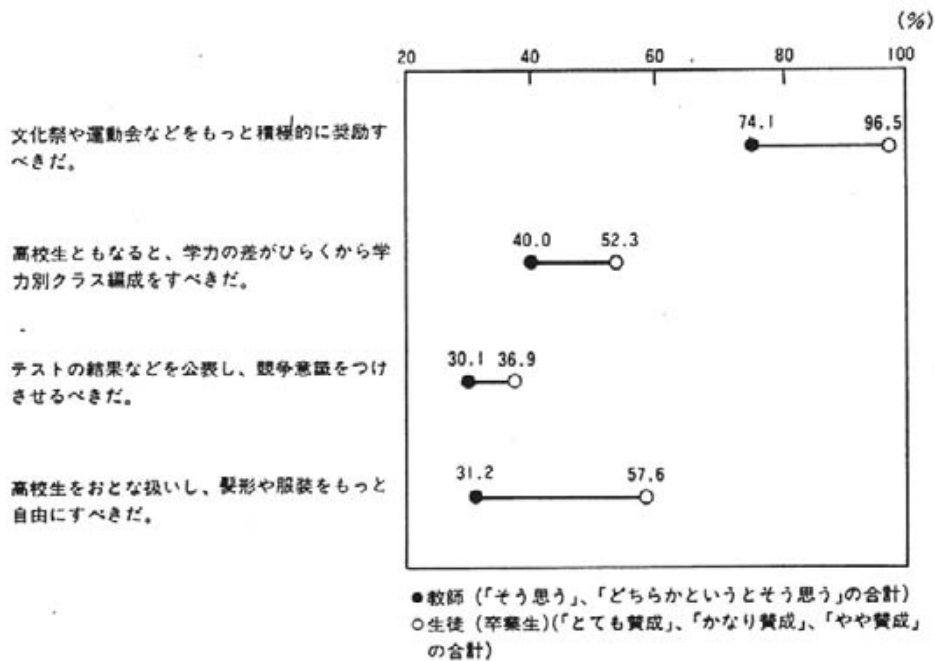
項目	尺度			
	そう思う	どちらかという とそう思う	どちらか という とそう は思わない	そうは 思わない
文化祭や運動会などを積極的に奨励すべきだ	26.7	47.5	21.9	3.9
	74.2		25.8	
受験勉強は苦しみに耐える忍耐力が身につく	18.7	46.8	25.4	9.1
	65.5		34.5	
受験勉強でついた能力は、大学での勉学の基礎になる	16.3	46.3	27.9	9.5
	62.6		37.4	
高校と比べると学力の差が広がるのを学力別クラス編成で防ぐべきだ	17.1	35.2	30.7	17.0
	52.3		47.7	
受験のための勉強はむしろ創造力を育てる上で害になる	15.9	34.1	38.0	12.0
	50.0		50.0	
入試の結果などを公表し、競争意識をつけさせるべきだ	5.0	31.9	40.1	23.0
	36.9		63.1	
高校生をおとな扱いし、髪形や服装をもっと自由にすべきだ	7.1	24.1	38.7	30.1
	31.2		68.8	

の2項は生徒より教師に受け入れられやすい意見であるという解釈は成り立つのである。つまり、これらの調査結果は、学力別クラス編成、テスト結果の公表などで競争意識をつけさせるという、勉強重視の教育を求める教師。文化祭・運動会の充実や、髪形・服装の自由化など、のびのびと自己表現のできる高校生活を望む生徒。この両者の対立する姿をうきばりにしているのである。こうした基本的態度の違いが、ともすれば教師と生徒の間

の溝を深めてしまい、相互理解を困難にする一因となっていることは否めないだろう。

しかし、高校教師とひと口に言っても、いろいろな特性を持った人間の集まりである。単純にすべての教師が勉強重視の教育を求めているのだとかたづけるべきものではない。教師社会には年齢や教科の違いに起因するさまざまな高校教育観が渦巻いているはずである。

図Ⅳ-1 高校教育に対する考え——教師と生徒——



注) 卒業生調査のカテゴリーは、「とても賛成」、「かなり賛成」、「やや賛成」、「やや反対」、「かなり反対」、「まったく反対」の6つ

(資料) : 生徒(卒業生)のデータは「モノグラフ・高校生'82, Vol.7 高校生活をふりかえって——大学生の意見——」より引用

## (2)二つの高校教育観

そこで、高校教師にとって代表的な属性をいくつかとりあげ、高校教育観との関係を見たものが、図Ⅳ-2である。

まず「年齢」に焦点を当ててみよう。「文化祭・運動会を奨励」は、全体では74%の教師が「(どちらかという)そう思う」と答えていた(表Ⅳ-1)。ところが50歳以上の教師のみをとり出せば、57%にすぎない。これに対し、30歳以下の若い教師はというと87%にも及ぶ。逆に「受験勉強は忍耐力をつける」では年齢の高いほど賛成が多くなっている。同様に、年齢が高くなるにつれて受け入れられやすくなる教育観は、「受験勉強でついた能力は大学の勉学の基礎となる」、「学力別クラス編成」、「テスト結果の公表などで競争意識をつける」がある。したがって年齢との関係から分類すると、高校教育観は前述の4項目(イウエカ)と、残りの3項目(「文化祭などの奨励」、「受験による創造性への害」、「髪形などの自由」)の2グループに大別できる。

このグルーピングはそのまま役職との関係による分類にあてはまる。すなわち前者は生活指導に比べて、進路指導にあたる教師の方に、より強く受け入れられる考えとなっている。

次に担当教科に目を向けてみると、ここではこれまでの二つの属性とは異なった傾向が見い出せる。「文化祭や運動会を奨励」の項を除くと、程度の違いこそあれ、すべての高校教育観において、主要5教科の教師の方がその他の教師に比べて、「(どちらかという)そう思う」の回答率が高くなっているのである。この結果に関する限り、主要5教科の教師は方向の違いは別にして、とにかく自分なりの教育観を抱きやすいといえよう。ただし全体的にあまり大きな比率の差がないので、仮説の域を出ない。また文化祭や運動会の奨励を望む者が主要5教科以外の担当教師に多いことは、これらの教科に芸術や体育など、

校内イベントで中心的な役割を果たす実技科目が含まれているためと思われる。

このように、担当教科の違いが高校教育観の違いに結びつくという推察は困難である。もっとも、ここでは教科を強引に、英語・国語・数学・社会・理科と、その他に2分類してしまっている。こうせずに、各教科ごとに高校教育観との関係を調べたなら、ある程度特性は見い出せるであろう。

たとえば「受験勉強は忍耐力をつける」という項目について教科別に見ると

「そう思う」+「どちらかというと思う」	
英語 69%	芸術 } 62%
理科 69%	家庭 }
数学 66%	体育 55%
社会 63%	
国語 61%	

である。つまり芸術・家庭と体育を除くと、英語・理数系の方が文科系に比べて割合が高い。

この他の「受験勉強は大学の勉学の基礎になる」、「学力別クラス編成」「競争意識をつける」などの項目も同様の傾向を持っている。

逆に、「受験勉強は創造性を育てる害になる」では、

英語 49%	芸術 } 45%
理科 47%	家庭 }
数学 43%	体育 46%
社会 54%	
国語 58%	

となっており、文科系の方が割合が高い。そして「文化祭などの奨励」、「髪形などの自由」に関してもこれと同様である。

以上、個人の属性と高校教育観の関係を見てきた。この結果、教師の高校教育観は二つに大別できることがわかった。

グループを項目で見ると、「学校行事、

創造性・自由を重んずる意識」である。これらの項目によるグループを人間解放型と呼ぶことができよう。生徒に近い世代である年齢層、課外活動や勉強以外の側面で生徒とかわる機会の多い生活指導の教師に、これらの項目が受け入れられていることから、この命名は妥当と思われる。

一方、もう一つのグループは、「受験勉強、学力別クラス編成、競争意識の付与を認める」

項目で、勉強推奨型と名づけることにする。こちらも受験指導が役割の一つとされている進路指導教師や、受験競争の厳しさを長い教師生活を通して肌で体験し続けている高い年齢層で、回答率が高いだけに納得できよう。

担当教科で見た場合、文科系には人間解放型が多く、英語・理数系には勉強推奨型が多かった。これはおそらく、学科の性質上、文科系では人間や社会の問題を扱う場合が多く、

図Ⅳ-2 高校教育に対する考え×属性

(「そう思う」と「どちらかというと思う」の合計、単位：%)

属性	高校教育に対する考え		(ア)	(イ)	(ウ)	(ロ)	(ハ)	(ニ)	(ホ)
	「そう思う」	「どちらかというと思う」	文化祭や運動会などを、もっと積極的に奨励すべきだ	受験勉強は苦しみに耐える忍耐力が身につく	受験勉強でついた能力は、大学での勉学の基礎となる	高校生ともなると学力の差がひろくから、学力別クラス編成をすべきだ	受験のための勉強は、むしろ創造力を育てる上で害になる	テストの結果などを公表し、競争意識をつけさせるべきだ	高校生をおとな扱いし、髪形や服装をもっと自由にすべきだ
年齢層	30歳以下	77	63	61	51	52	34	32	
	31-49歳	57	79	71	60	44	36	32	
	50歳以上	57	79	71	60	44	42	29	
担当教科	主要5教科	80	59	60	47	46	32	32	
	その他	83	54	58	45	50	32	21	
性別	男性	72	67	63	56	49	39	31	
	女性	71	68	65	44	52	31	34	

注1) 「主要5教科」とは、英語、国語、数学、社会、理科を指す。

注2) 「役職」は、上記以外のものを省略した。ただし「厚生・保健」は「生活指導」に含めた。

受験モノカルチャー的な現在の高校教育に疑問を抱くことの多い教師が集まっているためではなからうか。

個人属性と高校教育観の関係は以上の通りである。次いで学校属性について検討してみよう。図Ⅳ-2の、共通一次受験者数の割合を指標とした「学校ランク」に注目してほしい。

共通一次受験者の割合と高校教育観の関係は、あまり顕著ではない。とはいっても、「学力別クラス編成」、「競争意識をつける」

では、7割以上の高校に比べて、それより少ない高校の方が多くなっている。生徒の学力レベルを上げるための苦勞が大きく、学力別クラスやテスト結果の公表などの手段をとってでも、教育効果をあげたい、という気持ちの反映なのだろうか。

さて、個人属性についての分析で分類した二つの教育観の違いは、生徒の学校生活や進路指導との教師のかかわり方に影響があるのだろうか。以下そのあたりのところについて、検討をすすめていくことにする。

## 2. 相談相手としての教師

### (1) 相談の実態

高校生といえば成人を間近にひかえ、いわば子どもからおとなへの移行期といえる。それだけに不安定感や悩み・葛藤を抜きにして彼らの青春を語ることはできまい。

したがって社会と高校生の接点にある存在として、高校教師が適切な援助の手を添えることは、生徒が社会人として脱皮するうえで、貴重な力となるに違いない。その意味で教師が、高校生の勉学や日常生活に関するよきカウンセラーであることは、非常に大切なことであろう。

しかし実際には、高校教師はあまり相談相手として生徒から認められていないようである。表Ⅳ-2がそれを物語っている。

表Ⅳ-2は、生徒から相談されることが「よくある」と「ときどきある」の割合を加えた数値を大きい順に並べたものである。これによると、「卒業後の進路」(87%)、「勉強の内容やしかた」(87%)といった、就職や受験を含んだ勉強中心の相談が圧倒的に多いことがわかる。3番目に相談の多い「学校や教師への不満」(59%)は、むしろ生徒から受け入れられない教師が多いことも意味し、こ

の項目が上位にあることはかえって反省すべき現象ともいえる。

4番目の「クラブ活動のこと」(56%)から最も下位の「恋愛・異性問題」(20%)は、日常の学校内外での生活、あるいは人間としての生き方といった、勉強以外の高校生活全般についての相談である。これらに関する相談は表に示した数値からわかるようにきわめて少ない。

つまり、勉強中心の相談に限られ、生活全般については、高校教師はほとんどカウンセラーとしての機能を果たしていない、といえる。

それでは、生徒からの相談の頻度や種類は、教師の属性によって異なるのだろうか。そのことを示したものが図Ⅳ-3である。

まず教師の年齢と相談の内容の関係に着目してみよう。「卒業後の進路」、「勉強の内容やしかた」といった項目では、年齢による相談率の違いはとくに認められない。残る項目については、「学校や教師への不満」、「クラブ活動のこと」、「友人関係」、「恋愛・異性問題」など、学校内の日常生活にかかわる問題で、しかも教師にとっても身近なことからでは、年齢の上昇とともに、相談される割合が低下している。逆に「人間としての生き

方、「家庭の問題」といった、比較的問題が深いテーマの場合は、年齢の高い層の方が相談されやすくなっている。

つまり身近で日常的な問題は近よりやすい若い教師へ、深くて大きな問題は経験豊富な熟年教師へ、といったテーマによる相談相手の選別が、生徒によってなされているようである。

次に担当教科と役職については、どのようであろうか。担当教科では、「勉強の内容やしかた」が、主要5教科89%、その他の教科67%で、主要5教科の相談率の方が高くなっていることを除けば、すべての項目でその他の教科担当の方が相談されやすくなっている。役職で見ると、「卒業後の進路」と「勉強のしかた」では進路指導、その他の相談内容では程度の差こそあれ、生活指導の方が相談率が高い。

つまり明らかに知識が豊富とわかっている

限り「卒業後の進路」、「勉強の内容やしかた」の問題については教科や進路指導の専門の教師に相談に行くが、そうでない場合は、比較的近よりやすい、芸術・家庭・体育、あるいは生活指導の教師のもとへ足を運ぶ、という、生徒の相談パターンがあるようである。

高校教育観の場合と同様、担当教科を細かく見ると、例えば「人間としての生き方」では、相談されることが「よくある」、「ときどきある」の合計は、英語33%、国語45%、数学37%、社会45%、理科40%、芸術・家庭46%、体育51%である。他の相談内容についても調べてみれば、芸術・家庭と体育についてはとくに一般的な傾向を見出すことができないうが、英語から理科については、上記の例と同様、英語・理数系に比べて文科系の方が、一般的な生活・人生の問題の相談率が高くなっている。(ただし、芸術・家庭・体育よりは低い。)

表Ⅳ-2 生徒からの相談内容

項目	尺 度		
	よくある	ときどきある	ほとんどない
① 卒業後の進路	34.0	52.3	13.7
	86.3		
② 勉強の内容やしかた	22.7	64.0	13.3
	86.7		
③ 生活指導(生活の悩み)	5.8	53.3	40.9
	59.1		
④ 生活指導(生活の悩み)	9.1	47.0	43.9
	56.1		
⑤ 人間としての生き方	3.2	37.4	59.4
	40.6		
⑥ 恋愛問題	3.1	30.9	66.0
	34.0		
⑦ 家庭の問題	1.9	31.4	66.7
	33.3		
⑧ 恋愛・異性問題	1.7	18.3	80.0
	20.0		

以上相談相手としての教師のパターンを個人属性からまとめると、次のようになる。勉強や進路については主要5教科、進路指導の教師、その他全般的な生活・人生の問題については主要5教科以外、生活指導の教師が相談されやすい。ただし、全般的な生活・人生の問題のうちでも、身近で日常的な問題は若い教師、深い問題については熟年教師が、とくに相談されやすくなっている。

ちなみに図表には掲載していないが、クラス担任をもっているか否か、と相談の関係とを見ると、担任をもっている方が相談される割合が高くなっている。これは担任をもつ方が生徒と接する機会が多くなることを考えると、当然といえよう。

最後に共通一次受験者数の割合について見ると、次の通りである。共通一次受験者が2割以下の非進学校では、「学校や教師への不

図IV-3 生徒からの相談内容×属性

(「よくある」と「ときどきある」の合計、単位：%)

生徒からの 相談内容		属性							
		(ア) 卒業後の進路	(イ) 勉強の内容やしきた	(ウ) 学校や教師への不満	(ロ) クラブ活動のこと	(ハ) 人間としての生き方	(ニ) 友人関係	(ホ) 家庭の問題	(ヘ) 恋愛・異性問題
年齢	30歳以下	89	87	59	59	31	33	26	26
	31～49歳	89	87	59	59	40	33	36	19
	50歳以上	85	86	50	49	50	32	32	17
職種	主要5教科	89	67	72	71	50	48	33	19
	その他	89	67	72	71	50	48	40	23
生活指導	生活指導	80	80	65	62	43	34	31	20
	その他	80	80	65	62	43	38	36	24
学年	1～2年	88	90	53	59	35	35	33	20
	3～5年	88	94	50	56	43	33	37	19
性別	男子	88	94	50	56	48	33	29	22
	女子	88	94	50	56	48	33	29	22

注1) 「主要5教科」とは、英語、国語、数学、社会、理科を指す。

注2) 「職種」は、上記以外のものを省略した。ただし「厚生・保健」は「生活指導」に含めた。



満」が68%で、進学校に比べると高くなっている。一方、「勉強の内容やしきたり」、「人間としての生き方」などは、進学校ほど相談されやすくなっている。非進学校において、生徒の不満が高まっている様子が表れていると言えよう。

## (2) 高校教育観との関連

これまで見てきた相談の実態は、教師自身

の高校教育に対する考えに、何らかの影響を受けているのだろうか。つまり前節で設定した高校教育観における人間解放型の教師と勉強推奨型の教師を比較した場合、生徒から受ける相談の頻度や内容に差があるのだろうか。

図Ⅳ-4は高校教育に対する考えと、生徒からの相談内容の関係を調べ、各項目間に正の関係がある場合に⊕印、負の関係がある場合に⊖印を記入して示したものである。例

図Ⅳ-4 「高校教育に対する考え」と「生徒からの相談内容」の関係

生徒からの 相談内容	高校教育に対する考え								
	① 卒業後の進路	② 勉強の内容やしきたり	③ 学校や教師への不満	④ クラブ活動のこと	⑤ 人間としての生き方	⑥ 友人関係	⑦ 家庭の問題	⑧ 恋愛・異性問題	⑨ その他
○ (a) 文化祭や運動会などを、もっと積極的に奨励すべきだ			⊕	⊕		⊕			
● (b) 受験勉強は否しみに耐える忍耐力が身につく			⊖						
● (c) 受験勉強でついた能力は、大学での勉学の基礎になる		⊕	⊖						
○ (d) 高校生ともなると学力の差がひらくから、学力別クラス編成をすべきだ									
○ (e) 受験のための勉強は、むしろ創造力を育てる上で害になる		⊖	⊕						
● (f) テストの結果などを公表し、競争意識を付けさせるべきだ		⊕	⊖						
○ (g) 高校生をおとな扱いし、髪形や服装をもっと自由にすべきだ									

注) 「高校教育に対する考え」のスケール……………  
 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4  
 そう思う どちらかという どちらかという そうは思わない そうは思わない  
 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4

「生徒からの相談内容」のスケール……………  
 1 ————— 2 ————— 3  
 よくある ときどきある ほとんどない  
 1 ————— 2 ————— 3

○ : 人間解放型高校教育観      ● : 勉強推奨型高校教育観  
 ⊕ : 5%有意水準で正の関係      ⊖ : 5%有意水準で負の関係

例えば「文化祭や運動会などを、もっと積極的に奨励すべきだ」と思う度合の強いほど、「学校や教師への不満」を相談される頻度が高い（5%有意水準で正の関係）ため、該当する欄に⊕印をつけてある。また、「受験のための勉強は、むしろ創造力を育てる上で害になる」と思う度合の強いほど、「勉強の内容やしかた」を相談される頻度が低い（5%有意水準で負の関係）ため、こちらは該当する欄に⊖印をつけてある。

図によると、「学校や教師への不満」の相談は、⊕が2、⊖が3、ついており、高校教育観と強い関係のあることがわかる。しかし、図全体としては、⊕⊖の数が少なく、高校教育観を相談内容との間に、あまり明らかな関係があるわけではないことを示唆している。

しかしながら記号のついている欄のみに注目すれば、一貫性のある関係が潜んでいることがわかる。すなわち、人間解放型高校教育観をもつ教師は、勉強の相談をあまり受けずに日常生活に関する相談をよく受ける。一方、勉強推奨型高校教育観をもつ教師は、勉強の相談をよく受ける半面、日常生活に関する相談をあまり受けていない。これらの関係は、先に述べたように、図全体の⊕、⊖の数が少ないため断定することはやや危険であるけれ

ども、一般的傾向としてはほぼ認めてよいと思われる。

本章のこれまでの分析を通して、高校教師の社会には、特徴的な二つのグループが存在することがわかる。

一つは、学校行事、創造性、自由を重んずる人間解放型の高校教育観をもち、もっぱら勉強よりも生徒の日常生活に関する相談相手になるグループである。主として若く、主要5教科以外・生活指導の教師によって形成される。

もう一つは、受験勉強、学力別クラス編成、競争意識の付与を重んずる勉強推奨型の高校教育観、日常生活全般についてはあまり生徒の相談相手にならないけれども、勉強のことについては相談を受けやすいグループ。ここには主として、高齢層、進路指導の教師が含まれている。

また、芸術・家庭、体育の教師を除いて、英語・理数系、文科系の教師を比較すると、英語・理数系は人間解放型、文科系は勉強推奨型に近い特徴をもっていることもわかった。

これら2グループの教師群は、高校生の進路選択——大学進学——に関しては、どのような傾向をとるのだろうか。次節ではそこまで分析を進める。

### 3. 進路選択とのかかわり

#### (1) 大学についての知識

現在勤務している学校の生徒がよく進学する大学について、高校教師がどの程度知っているか、を質問した結果が表Ⅳ-3である。

ここで特徴的なことは、入学試験までに必要な知識を除くと、高校教師は大学についてほとんど何も知らないということである。つまり、受験生、とくに女子にとって志望校決定の判断材料になる「取得できる資格」を含め、「入試の難易度」、「過去の入試の傾向」

といった、いわゆる受験情報を知っているだけである。

そして「学生生活の雰囲気」、「生徒の関心に合った勉強ができるかどうか」、「講義内容や教授陣」など、本来なら最も大切と思われる「その大学で何ができるか」に関することは、「とても知っている」と「かなり知っている」を合わせても10~20%程度にすぎない。

これでは進路指導といっても、せいぜい「受験指導」程度で、生徒の将来の人生を見越し

表Ⅳ-3 大学についての知識

—現在の勤務校の生徒がよく進学するような大学について—

(%)

項目	尺度			
	とても知っている	かなり知っている	少し知っている	ほとんど知らない
(ア) 入試の難易度	14.6	58.6	24.6	2.2
	73.2			
(イ) 取得できる資格	7.8	48.8	37.7	5.7
	56.6			
(ウ) 過去の入試の傾向	7.2	39.2	40.9	12.7
	46.4			
(エ) 学風や大学の環境	2.8	31.2	47.3	18.7
	34.0			
(オ) 就職状況	2.7	25.0	48.9	23.4
	27.7			
(カ) 学生生活の雰囲気	1.8	22.6	48.4	27.2
	24.4			
(キ) 生徒の関心に合った勉強ができるかどうか	1.1	19.8	48.6	30.5
	20.9			
(ク) 講義内容や教授陣	1.5	12.2	46.0	40.3
	13.7			

た指導は困難であろう。

大学についての情報に関する教師のこういう傾向は、図Ⅳ-5に示すように、生徒の実態と酷似している。生徒にとって教師は、大学に関する貴重な情報源である。その情報源と、生徒の知識のバランスが似てくるのも、無理からぬことかもしれない。

入学試験の難易度を基準に多くの受験生が志望大学を決定してしまう、という批判がなされることが多いが、指導者としての高校教師にも当然その責任の一端はある。本当に生徒の将来を思うのなら、大学を知るためにさらに動き回ることが必要といえる。

ただし大学の側にもPR不足の責任はある。大学案内のパンフレットの発行の他、各地域で実施される進学相談会などを通して、キャンパスやカリキュラムの内容を広報しているようではあるが、まだまだ情報量が少ない。大学と高校の相互交流を深め、高校教師さら

には当事者である受験生に実のある大学情報が提供されることを望みたい。

次に大学についての高校教師の知識を、属性別に示したものが図Ⅳ-6である。

これによると、すべての項目にわたって、高い年齢層、主要5教科、進路指導の教師に認知度が高く、学校属性では進学校の方が認知度が高い。これらはいずれも、進路指導の経験と機会の量から考えると妥当な傾向と思われる。

ただし、進路指導の教師ですら「生徒の関心に合った勉強ができるかどうか」(25%)、「講義内容や教授陣」(17%)をほとんど知らないでいる。せめて進路指導担当の教師ぐらいは、ある程度大学の内容や卒業後の可能性などを把握しておける状態になることが望まれる。

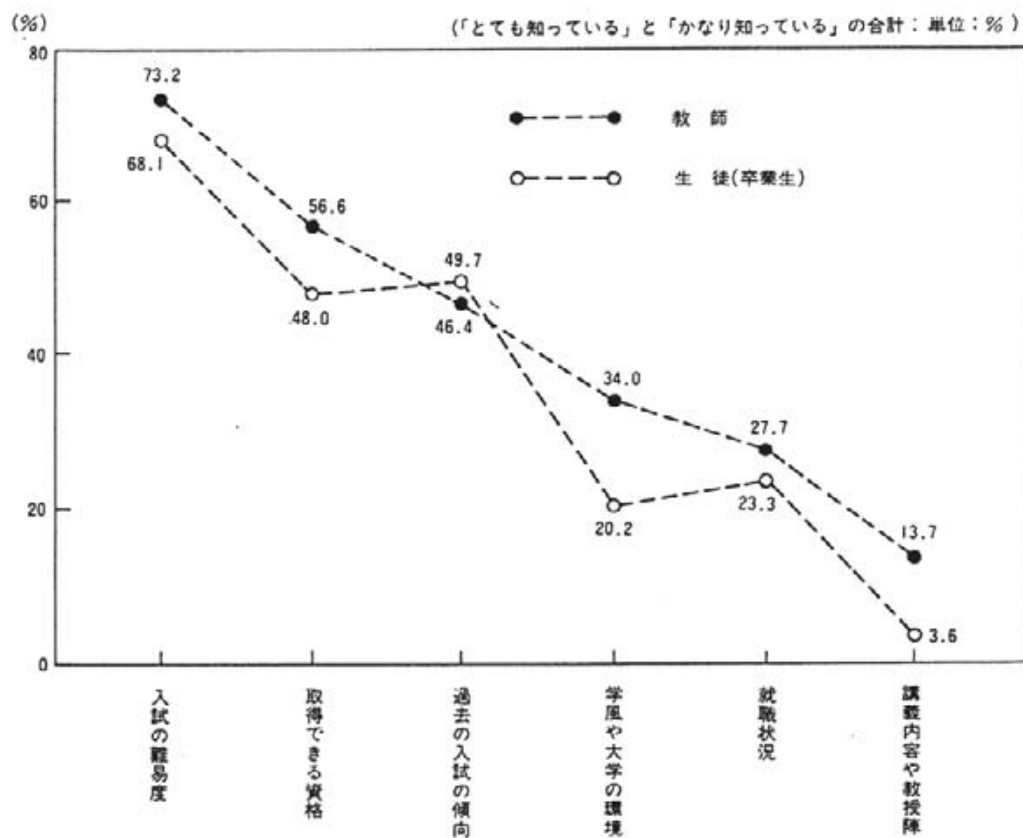
ところで、大学についての認知度が高い個人属性のパターンは、高校教育観に関する勉

強推奨型によく似ている。そこで高校教育観と大学についての知識の関係をみると、図IV-7に示したように、かなり強い関係のあることがわかる。

「文化祭や運動会などを奨励」をはじめ人

間解放型高校教育観を指向する教師は、大学についての各知識があまりない。逆に「受験勉強は忍耐力をつける」など勉強推奨型高校教育観を指向する教師は、大学についてよく知っている。

図IV-5 大学についての知識——教師と生徒——



注) 卒業生調査のカテゴリーは、「とても知っている」、「かなり知っている」、「やや知っている」、「あまり知らなかった」、「ぜんぜん知らなかった」の5つ

(資料)：生徒(卒業生)のデータは「モノグラフ・高校生'82. vol.7 高校生活をふりかえって——大学生の意見——」より引用

このように、高校教育に対する考え方は、前節で述べたように生徒からの相談内容に影響を及ぼすだけでなく、進路指導に関する態度にまで反映してきている。人間解放型、勉強推奨型といった二つの高校教育観のタイプ

が生み出す、異なった姿の生徒指導像が、それぞれ長所を伸ばしながら高校教育の両翼として機能してゆくことが理想であろう。

図Ⅳ-6 大学についての知識×属性

(「とても知っている」と「かなり知っている」の合計、単位：%)

大学についての知識		(イ) 入試の難易度	(ロ) 取得できる資格	(ハ) 過去の入試の傾向	(ニ) 学風や大学の環境	(ホ) 就職状況	(ヘ) 学生生活の雰囲気	(セ) 生徒の関心に合った勉強ができるかどうか	(シ) 講義内容や教授陣
属性									
年齢	30歳以下	75	59	49	33	27	23	19	11
	31-49歳	84	70	61	49	43	37	34	26
	50歳以上								
担当教科	主要5教科	46	44	25	22	24	16	15	7
	その他の教科								
専攻	進路指導	62	46	38	27	24	19	19	8
	生活指導								
学歴	大学以上	80	60	50	37	30	27	19	12
	3年以上	83	62	59	42	34	32	29	21

注1) 「主要5教科」とは、英語、国語、数学、社会、理科を指す。

注2) 「就職」では、上記以外のものを省略した。ただし「厚生・保健」は「生活指導」に含めた。

図IV-7 「高校教育に対する考え」と「大学についての知識」の関係

高校教育に対する考え	大学についての知識							
	① 入試の難易度	② 取得できる資格	③ 過去の入試の傾向	④ 学風や大学の環境	⑤ 就職状況	⑥ 学生生活の雰囲気	⑦ 生徒の関心に合った勉強ができるかどうか	⑧ 講義内容や教授陣
○ (ウ) 文化祭や運動会などを、もっと積極的に奨励すべきだ		⊖	⊖	⊖			⊖	
● (イ) 受験勉強は苦しみに耐える忍耐力が身につく	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕
● (ウ) 受験勉強でついた耐力は、大学での勉学の基盤となる	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕
● (ロ) 高校生ともなると、学力の差がひらくから学力別クラス編成をすべきだ	⊕	⊕	⊕					
○ (イ) 受験のための勉強は、むしろ創造力を育てる上で害になる		⊖	⊖		⊖	⊖	⊖	⊖
● (ウ) テストの結果などを公表し、競争意識をつけさせるべきだ	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕
○ (ロ) 高校生とおとな扱いし、髪形や服装をもっと自由にすべきだ		⊖	⊖		⊖		⊖	⊖

「高校教育に対する考え」のスケール……… 1 2 3 4  
 1: 1 (そう思う)      2: 2 (どちらかというそう思う)      3: 3 (どちらかというそうは思わない)      4: 4 (そうは思わない)

「大学についての知識」のスケール……… 1 2 3 4  
 1: 1 (とても知っている)      2: 2 (かなり知っている)      3: 3 (少し知っている)      4: 4 (ほとんど知らない)

○: 人間解放型高校教育観      ●: 勉強推奨型高校教育観  
 ⊕: 5%有意水準で正の関係      ⊖: 5%有意水準で負の関係

## (2)大学への期待

先に述べたように、高校教師は教え子が進学する大学について、ほとんど知らない。このように大学に対する認知度が低い彼らは、いったい大学に対して何を期待しているのだろうか。

表Ⅳ-4によると、大学についての知識が乏しかったわりには、各方面に向けてかなり大きな期待を大学に対して抱いているようである。考え方や判断力、厳しい授業、幅広い教養、生涯の友人、関心に合った勉強といった具合に、じつに多様な期待を寄せている。

大学に関する知識の乏しさに比べて、この期待の高さはあまりにも一方的で虫がよすぎる、という感も多少ある。たとえば表Ⅳ-3

で「生徒の関心に合った勉強ができるかどうか」を「とても」あるいは「かなり」知っている教師は21%にすぎなかった。これに対し、「生徒の関心に合った勉強ができるようなカリキュラムを用意してほしい」と「とても」あるいは「かなり」思う教師は71%にもものぼる。期待する前に、まず可能な限り情報を集めるべきではなからうか。

つづいて大学への期待を属性別に見たものが図Ⅳ-8である。

年齢では多くの項目に対し高い年齢層の方が期待が高くなっており、若年層はあまり大学に対して期待していない。担当教科では各項目ともあまり大きな差が認められないけれども、「一流の就職ができる」などでは主要5教科、「せめて一つぐらいいは資格を」ではその他の教科が、いく分期待を強くもっている。

表Ⅳ-4 大学への期待

項目	尺度			
	とても そう思う	かなり そう思う	少し そう思う	ほとんど 思わない
1. しっかりとした学力と判断力を身に付けさせること	45.9	44.7	7.5	1.9
	90.6			
2. 知識を広く深く身につけること	40.8	40.8	13.9	4.5
	81.6			
3. 幅広い教養を身につけること	23.4	56.3	17.0	3.3
	79.7			
4. 考え方や判断力を身につけること	32.6	41.4	19.2	6.8
	74.0			
5. 生涯の友人や関心に合った勉強の機会を創出すること	20.9	50.4	22.6	6.1
	71.3			
6. 就職活動や資格取得の機会を創出すること	11.9	32.2	32.8	23.1
	44.1			
7. 一流の就職先や資格取得の機会を創出すること	6.1	25.9	39.6	28.4
	32.0			
8. 資格の取得や就職先を創出すること	3.2	17.4	48.6	30.8
	20.6			
9. その他、各教科に特化した期待	0.4	3.1	17.7	78.8
	3.5			

役職もあまり顕著な傾向は見られない。わずかに「一流の就職ができる」に対して、進路指導の教師が大きく期待している程度である。

以上のように、個人属性については、高い年齢層の期待が大きいこと以外に、とくに傾向は見い出されない。

学校属性について特筆すべき点は、進学率の低い学校の教師ほど「せめて一つぐらいは資格をとらせてほしい」の期待が高いことで

ある。非進学校では、いわゆる「一流大学」への進学者は少なく、この程度の期待で甘んじざるを得ない、というのが実情かもしれない。

ところで、大学についての知識の多少は、大学への期待のしかたに影響してくるのだろうか。

図IV-9によると、正あるいは負の関係がある項目の組み合わせが多い。このうち「青

図IV-8 大学への期待×属性

(「とてもそう思う」と「かなりそう思う」の合計、単位：%)

大学への期待		属性		属性		属性		属性		属性		属性		属性	
		属性	属性	属性	属性	属性	属性	属性	属性	属性	属性	属性	属性	属性	属性
属性	属性	(イ)	(ロ)	(ハ)	(ニ)	(ホ)	(ヘ)	(ヘ)	(ト)	(チ)	(リ)	(ニ)	(シ)	(ス)	(セ)
		力	授業	幅広い	一生	生徒	せめて	一流	青春	とにか	し	し	し	し	し
年齢	30歳以下	86	85	76	73	73	41	27	28	3	注	5	3	3	6
	31～49歳	90	82	78	72	70	41	29	18	3					
	50歳以上	95	92	87	77	75	55	44	23	6					
注	注	95	83	82	74	66	52	33	21	3	注	4	3	4	
	注	90	75	80	74	67	44	26	19	3					
注	注	90	83	78	70	70	42	31	20	5	注	2	3	3	
	注	92	82	80	79	74	36	36	25	3					

注1) 「主要5教科」とは、英語、国語、数学、社会、理科を指す。

注2) 「校職」は、上記以外のものを省略した。ただし「厚生・保健」は「生活指導」に含めた。



春の一時期をゆっくり楽しませて」、「とにかく無事に卒業を」といった、消極的期待をもつことと、大学についての知識(入試情報)を身につけることは、負の関係にある。あまり期待もしないから、とくによく知る必要もない、ということだろうか。

その他の項目間にはおおむね正の関係があ

り、大学を知っている教師ほど、かける期待も大きい、という傾向が見い出せる。そして年齢的には若い層において、大学も知らず期待ももたない、高い年齢層では、大学を知っており、期待もかけるというパターンが大きくなっている。

図IV-9 「大学への期待」と「大学についての知識」の関係

大学への期待	① 入試の難易度	② 取得できる資格	③ 過去の入試の傾向	④ 学風や大学の環境	⑤ 就職状況	⑥ 学生生活の雰囲気	⑦ 生徒の関心に合った勉強ができるかどうか	⑧ 講義内容や教授陣
① しっかりした考え方や判断力を身につけてほしい	⊕	⊕、	⊕		⊕			⊕
② 授業は楽しくやってほしい	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕
③ 幅広い教養を身につけてほしい	⊕	⊕	⊕		⊕		⊕	⊕
④ 一生つき合ってもらえる友人が見つけれられるような環境をつくってほしい		⊕	⊕		⊕		⊕	⊕
⑤ 生活の関心に合った勉強ができるような環境をつくってほしい	⊕	⊕	⊕		⊕	⊕	⊕	⊕
⑥ 学風や大学環境がよい環境でほしい		⊕			⊕			
⑦ 過去の就職がよいような環境でほしい	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕	⊕
⑧ 授業の内容や教授陣がよい環境でほしい	⊖		⊖					
⑨ ほかの知識や経験が豊富でほしい	⊖							

「大学への期待」のスケール…………… 1 ———— 2 ———— 3 ———— 4  
 とても そう思う かなり そう思う 少し そう思う ほとんど そう思わない  
 「大学についての知識」のスケール…………… 1 ———— 2 ———— 3 ———— 4  
 とても 知っている かなり 知っている 少し 知っている ほとんど 知らない

⊕：5%有意水準で正の関係 ⊖：5%有意水準で負の関係

## 4. まとめ

### (1)生徒指導の概観

高校教師の生徒指導は、今回の調査結果に関する限りあまり充実したものでないようが見受けられる。全体として勉強重視の傾向が強く、生徒からの相談も勉強に関するものが中心で、生活全般にわたるカウンセラーとしての役割は果たしていない。さらに大学に関する知識は当面の受験対策に関するものに限られ、学生生活や大学卒業後の人生を見越したうえでの進路指導が困難になっている。したがって、大学への期待も単なる願望の域を出ず、浮わつたものとなっている。

### (2)生徒指導の2類型

生徒指導に関する特徴的な2類型が存在することがわかった。



一つ(A型)は人間解放型高校教育観をもち、もっぱら勉強よりも生徒の日常生活に関する相談相手になる型である。主として若年齢層、主要5教科以外、生活指導の教師から形成され、大学についての知識は乏しい。

もう一つ(B型)は勉強推奨型の高校教育観をもち、日常生活全般については相談相手にならないけれども、勉強のことについては相談を受けやすい型である。主として高齢層、進路指導の教師から形成され、大学についての知識が多い。

しかしながら以上の2類型は、あくまでも相対的な特徴にすぎない。たとえば、(1)で述べたように、A型の日常生活に関する相談も頻度が低く、B型における大学についての知識にしても受験情報を除くと、ほとんどないようなものである。さらに大学についての知識が乏しいことは、大学に対して消極的な期待しかもてないことと相関が高いから、A型の相談も大学進学など長期的な視野に立ったものに発展する可能性が少ないように思われる。

このA型、B型それぞれの特徴を伸ばしつつ、両者がかみ合って機能するような体制づくりが必要であろう。

### (3)非進学校の問題

非進学校では、教師に対する生徒の不満が多い、大学への期待が「せめて資格の一つでも」といった消極的なものになっている、大学についての知識が乏しいなどの問題を抱えている。受験優先の空気が高校教育の場をおおっている中で、非進学校の生徒は不安定になり、教師も学力向上の必要性和現実の高校生現状との間で悩んでいるのだろうか。

## 第V章 高校教師のライフスタイル



### 1. 高校教師の生活時間

いま、一人の高校教師を想定すると、日常の生活領域は学校で仕事をしている「公」的な部分と、勤務後の「私」的生活領域に分けて考えることができる。そこで「私」的生活領域における生活行動が、その人の教師としての構えをどのようにつくっているのかを見ることにしよう。

#### (1) 帰宅後の生活

まず、高校教師が一般に、勤務時間<sup>後</sup>をどのように過ごしているのかを探ってみる。最初に基礎的なデータを示せば、概要は表V-1にまとめられる。この表の結果から高校

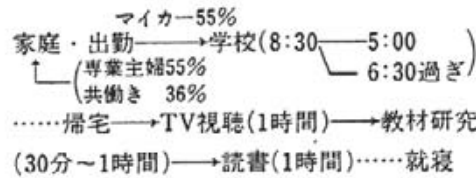
教師の生活を概括すると、  
まず家庭については

- ①妻の半数近くは仕事を持ち
- ②配偶者の4人に1人は同業の教師で、共稼ぎをしている(27%)
- ③1か月の小遣いは平均すると2万円
- ④半数以上はマイカー通勤で(55%)
- ⑤学校を出るのは5時頃のグループ(24%)と、6時半以降のグループ(25%)との二つに分かれる
- ⑥帰宅後、1時間ぐらいテレビをみてくつろぎ

- ⑦明日の授業に備えて、およそ30分から1時間下準備をする  
 ⑧そして、残り1時間ぐらゐを読書で過ごしている(44%)

となる。

一日の生活時間の中で、教師にとって生徒から解放される時間は、明日への自己を再生産するための貴重な時間といえる。それ故に、勤務“後”の生活時間の配分は、明日の教師としての仕事への姿勢にかかわってくる。そこで、あらためて高校教師の平均的な1日の生活時間を構成してみると、



というサイクルになる。

しかし、ここで考えなければならないのは、教師の力量や質をすぐれて規定してくると思われる教材研究や授業準備のために費やされる時間の配分である。これにはベテランの年輩教師と若い教師では、おのずと差がでてくるだろうと思い、帰宅後、授業の準備をする時間と年齢でクロスをとってみた。

表V-2の結果を見ると、意外にも予想に反して20代の若い教師と40代以上の年輩の教師ではともに1時間もしくはそれ以上の時間を教材研究などに費やすといった、似た状況をつくりだしているが、30代の教師は他の年代の教師に比べて、30分程度のほどほどですますことも多いようである。(20代=25%、30代=36%、40代=29%)。若い教師が教職経験の未熟さゆえに、教材研究や授業の下準備に多く時間をかけることは予想されること

表V-1 教師の一般的生活スタイル

		(%)					
主な通手段	電車・バス	23.3	自転車	7.3	徒歩	12.2	
	バイク	2.7	マイカー	54.5			
余暇	学校を出る時刻	4時半以前	2.1	5時頃	23.7	6時頃	18.5
		4時半頃	8.9	5時半頃	21.3	6時半以降	25.5
暇	夜、テレビをみる時間	30分くらい	18.2	1時間半くらい	25.9	3時間以上	2.4
		1時間くらい	35.0	2時間以上	17.9	4時間以上	0.6
間	帰宅後、授業の準備をする時間	30分くらい	30.2	1時間半くらい	19.3	3時間以上	2.4
		1時間くらい	33.0	2時間以上	14.8	4時間以上	0.3
	帰宅後、読書に費やす時間	30分くらい	26.8	1時間半くらい	14.2	3時間以上	3.2
		1時間くらい	43.5	2時間以上	12.0	4時間以上	0.3
1か月の小遣い	5千円くらい	5.3	2万円くらい	29.3	4万円くらい	10.0	
	1万円くらい	18.2	3万円くらい	23.4	5万円くらい	8.0	
					6万円以上	5.8	
結婚と子ども	未婚	16.3	既婚 子どもあり	77.0			
	既婚 子どもなし	6.4	その他	0.3			
配偶者の職業	教員	26.7	教員以外のパートタイム	5.9			
	教員以外のフルタイム	9.2	専業主婦	54.7			
			その他	3.5			

○印は最頻値

である。しかし、40～50代のベテラン教師に比べ、中堅の30代の教師が、教材研究や授業準備にあまり時間をかけていないということは、世代差による教師への構えとして注目されねばならない。

ところで、教師のテレビ視聴時間が、平均1時間とは、一般社会の平均的水準からすると、きわめて短いという印象を受ける。やはり知的情報源は、高校教師の場合、テレビより読書の世界に依拠していると見てよいであろう。

全体として高校教師の生活時間を見ると、「私」的生活領域においても、真摯でまじめな生活態度という印象をもったのである。

ただここで一つ、「学校を出る時刻」に、1時間半ものズレが教師間にあるのは、どんな要因によるのであろうか。また、その時間の開きは、以後の余暇時間の配分にも大きく関係してくると思われ、ライフスタイルの違

いとなって現れてくるのではなかろうか。表V-3は「学校を出る時刻」と属性によるクロスの結果を示している。

結果を要約すると

- ①最も顕著な差は性別。男子教師は6時半以降にも残っているが、女子教師は5時頃に集中している。そしてこのことは、帰宅後の家事の必要性によるものと推察される。
- ②若い年代の教師ほど、言い換えれば、教職経験の短い教師ほど、学校への残留時間が長い。年代が上昇するにつれて、帰宅時間は早まる。
- ③共通一次テストの受験率が高い、いわゆる進学校の教師ほど、学校を出る時刻が早まる傾向が多少ある。
- ④担当教科別では、体育や理科の教師に、遅くまで学校に残っている傾向がうかがえる。

表V-2 帰宅後、授業の準備をする時間×年齢

時間 年齢	時間 (%)					
	30分 くらい	1時間 くらい	1時間半 くらい	2時間 以上	3時間 以上	4時間 以上
30歳以下	25.2	33.9	(21.7)	15.7	3.5	0.0
31～34歳	(36.4)	31.8	17.6	11.2	3.0	0.0
35～39歳	(34.9)	30.4	18.7	14.0	1.6	0.4
40～44歳	28.1	33.3	19.4	16.7	2.5	0.0
45～49歳	29.4	(36.4)	17.8	14.1	1.9	0.4
50歳以上	29.7	32.2	19.4	15.8	1.9	0.8

表 V-3 学校を出る時刻×属性

(%)

属性		時刻					
		4時半以前	4時半頃	5時頃	5時半頃	6時頃	6時半以降
性別	男子	2.2	8.3	21.9	20.6	19.7	27.3
	女子	1.3	13.9	37.2	25.1	10.8	11.7
年齢	20代	0.6	4.3	22.3	17.7	24.4	30.7
	30代	1.4	9.1	22.4	22.4	20.4	24.3
	40代	2.0	8.3	25.1	22.9	18.3	23.4
	50代以上	4.4	13.7	24.5	20.4	11.9	25.1
教職経験	3年以下	1.4	4.2	22.2	17.4	24.3	30.5
	4～6年	0.0	5.5	20.6	17.0	24.8	32.1
	7～14年	1.6	8.0	21.6	23.2	20.2	25.4
	15年以上	2.7	10.4	25.3	21.7	16.1	23.8
勤続年数 (普通・非常勤)	20%以下	1.1	8.4	22.4	21.0	20.3	26.8
	30%前後	2.1	6.6	21.8	22.8	18.3	28.4
	50%前後	1.8	10.0	24.5	24.5	19.1	20.1
	70%以上	4.2	11.6	27.5	18.4	14.9	23.4
担当教科	英語	2.1	9.2	23.6	25.8	18.6	20.7
	国語	3.4	12.0	24.0	21.2	17.9	21.5
	数学	2.0	11.3	24.3	22.3	15.6	24.5
	社会	1.9	9.0	25.6	17.6	18.6	27.3
	理科	1.9	2.6	23.4	20.8	19.6	31.7
	その他	0.0	7.1	31.5	21.4	15.7	24.3
平均		0.0	3.5	3.5	10.5	31.6	50.9

## (2)学校帰りのつきあい

それでは、高校教師の「私」的生活領域における、具体的な行動をもう少し探ってみよう。

図 V-1 は、「学校帰りにお茶やお酒を飲みに行く時、どんな先生と一緒のときが多いか」を尋ねた結果である。それによるとインフォーマルなつきあいでは、①年齢の近い先生(29%)、②同じ教科の先生(18%)、③同じ学年の先生(18%弱)という順になる。

これを年齢別に見ると、20代の若い教師は、「年齢の近い」教師と行動を共にすることが多いが、40代以降になると、年齢の近さよりも、学年や教科の面でのつながりでインフォ

ーマルな行動が選択されていることがわかる。

また担当教科別に見ると、上記の全体の傾向を大きくくつがえすまでのものではないが、体育教師に特異な傾向が見られる。体育教師は、お茶やお酒を飲みに行くという、インフォーマルな行動とはいえ、体育科での同僚とのつきあいが中心という、教科への凝集傾向が見られる。

教師の「私」的生活行動が、年齢の近接による親密な感情に基づくものであれば、ごく自然な、あたりまえの人間としての行動と言えなくもない。けれども、教科や学年という学校組織上の関係が、「私」的生活行動にまで持ち込まれ、完全な組織人(オーガニゼーション・マン)として行動に制約が現れると

図 V-1 学校帰りに、お茶やお酒を飲みに行く時、その相手の先生は

		全体						(%)
		28.9	18.3	17.6	1.1	0.2	13.8	20.1
		年齢の 近い先生	同じ教科 の先生	同じ学年 の先生	校長・教 頭・主任	同じ出身 大学	その他	いかない
全	体	28.9	18.3	17.6	1.1	0.2	13.8	20.1
年 齢	30歳以下	(58.1)	13.2	10.4	0.3	0.3	6.3	11.4
	30～34歳	(34.8)	13.7	22.3	1.3	0.0	11.6	16.3
	35～39歳	(28.3)	19.6	19.6	0.0	0.0	12.5	20.0
	40～44歳	20.8	17.0	(24.1)	0.0	0.3	18.9	18.9
	45～49歳	17.6	(26.5)	16.9	1.1	0.4	15.7	21.8
	50歳以上	14.9	(20.3)	14.3	3.2	0.3	16.8	30.2
担 当 教 科	英 語	22.9	20.3	23.0	0.6	0.3	15.2	17.6
	国 語	31.8	16.0	17.8	0.6	0.3	15.2	18.3
	数 学	26.5	16.5	18.6	0.6	0.3	15.0	22.5
	社 会	35.1	19.0	14.6	2.7	0.3	11.6	16.7
	理 科	31.9	16.9	16.1	1.2	0.0	12.2	21.7
	芸術・家庭	33.4	7.2	10.1	0.0	0.0	10.1	39.2
	体 育	15.7	(39.3)	7.8	0.0	0.0	17.6	19.6

したら、教師の行動半径をせばめることになりはしないか。

考えてみると、教師のライフサイクルでは20代前半に教師生活をスタートさせると、40代の高校教師は、20年近くも学校という組織された単一の職場で仕事をしてきて、すでに学校を離れては自己を考えることができなく

なっている「学校人」として作りあげられた年代ということになる。その意味では、教師のライフスタイルにも、確かにいわゆる教師らしさが身についたと言えるのであろう。データの分析を通して、そのような印象を抱いたのである。

## 2. ファッションと職業意識

教師たちは、「高校の教師」の仕事を次のように評価していた（第II章、4を参照）。

「精神的に気苦勞の多い（89%）」、「生徒と接する喜びのある（86%）」、「体力のいる（79%）」、「専門に関して高度の知識が必要（77%）」な仕事であると。

これらを通してうかがえることは、高校教師の現状認識が、自らの仕事に対する満足感と表裏させて、教師の仕事に精神的・肉体的・知的に高度な資質を課していることである。言うならば、こうした「教職」というものに対する自己規定は、高校教師の職業的倫理観として、その内面性を形成しているものである。

しかし、職業倫理の問題は、M・ウェーバーの指摘をまつまでもなく、教職の実践のうちから生み出されて、個々の高校教師の生活態度に方向づけを与えているものが、日常の行動様式や、職場生活において、どのようなあらわれ方をしてきているかということが焦点である。そして、そこに現実とのズレがないかどうかという点であろう。

### (1) 職業柄への意識

まず、通勤のときの服装やスタイルについて、「高校教師としての職業柄」を、どの程度意識しているかを見てみよう。

図V-2に見られるように、「とても意識

図V-2 服装やスタイルの職業柄意識×年齢

		(%)				
全体		5.6	23.1	37.2	26.8	7.3
年齢	尺度	とても意識する	かなり意識する	やや意識する	あまり意識しない	ぜんぜん意識しない
	全体		5.6	23.1	37.2	26.8
30歳以下		4.6	20.7	43.0	25.6	6.1
31～34歳		4.2	14.2	38.7	30.4	12.5
35～39歳		3.8	17.9	38.4	31.2	8.7
40～44歳		5.7	25.4	36.3	27.8	4.8
45～49歳		6.1	25.6	38.0	22.7	7.6
50歳以上		8.0	30.6	30.8	24.6	6.0



する」6%、「かなり意識する」23%、と、職業柄を積極的に意識する派が29%、「やや意識する」というほど派が37%、そして「あまり意識しない」27%、「ぜんぜん意識しない」7%と、職業柄にこだわらない独自派が34%いる。一応半数以上の約66%の高校教師は、職業柄を意識した、何らかの服装やスタイルをしている。高校教師という仕事は、多感な高校生相手の仕事であり、もう少し職業柄を意識した割合が高いと想像していたがそれほどではなく、3人に1人は、教師という仕事に関係なく、服装やスタイルでの独自性を押し通していた。

年齢別では、職業柄にこだわらない独自派は、30代に多くなっている。教科別に見ると、表V-4のように、体育教師(43%)と、理数系教師(理科41%、数学37%)に、職業柄にこだわらない、比較的独自性の強いスタイルが浮かび出ている。

## (2)高校教師のファッション

職業柄を意識するにせよ、しないにせよ、とにかく一般に高校教師の通勤スタイルを描くとすれば、どのようなものになるであろうか簡単なファッション考現学を試みてみよう。

表V-5、表V-6は、ふだんの通勤のときの服装やスタイルを尋ねた結果である。

まず気づくのは、男子教師とネクタイの結びつきである。ネクタイ派教師は77%となっている。さらにバッグ類について見れば、ビジネス・バッグが主流である。一口に言えば男子教師のスタイルは、ネクタイとビジネス・バッグに象徴されていると言ってよいであろう。その次にショルダーバッグ派(34%)が傍系的なスタイルとしてそえられることになる。

一方、女子教師のスタイルは、カーディガン、セーターなどの軽装に、スカート(スラ

表V-4 服装やスタイルの職業柄意識×担当教科

教科	尺度				
	とても意識する	かなり意識する	やや意識する	あまり意識しない	ぜんぜん意識しない
英語	5.8	23.0	38.0	25.9	7.3
	66.8			33.2	
国語	5.9	25.7	38.0	22.3	8.1
	69.6			30.4	
女子	4.6	22.0	36.2	29.3	7.8
	62.9			37.1	
社会	5.2	21.0	42.3	24.8	6.8
	68.4			31.6	
理科	4.9	23.6	30.4	34.2	6.8
	59.0			41.0	
音楽・家庭	12.9	27.1	32.9	24.3	2.9
	72.8			27.2	
体育	1.8	10.7	44.6	32.1	10.7
	57.2			42.8	

表 V-5 男子教師の通勤スタイル×年齢

(%)

年齢	スタイル	スー ツ	ブレザー	ブレザー・ ノーネクタイ	カジュアル ウェア	スポーツ ウェア	そ の 他
		ネ ク タ イ					
全 体		43.4	33.7	12.2	7.9	2.2	0.6
		77.1		22.9			
30 歳 以下		22.1	(44.2)	11.6	19.3	2.8	0.0
31 - 34 歳		22.2	(41.0)	18.4	14.6	3.8	0.0
35 - 39 歳		32.7	(39.5)	15.2	8.1	3.6	0.9
40 - 44 歳		(42.3)	36.8	11.3	6.5	2.4	0.7
45 - 49 歳		(54.7)	30.4	10.9	2.8	1.2	0.0
50 歳 以上		(71.0)	18.3	8.4	0.6	0.6	1.1

表 V-6 女子教師の通勤スタイル×年齢

年齢	スタイル	スーツ・ワンピース	カーディガン スカート (スラックス)	軽装・ジーンズ	スポーツウェア
	全 体		31.6	66.2	0.4
30 歳 以下		11.6	85.6	1.4	1.4
31 - 34 歳		23.1	73.1	0.0	3.8
35 - 39 歳		29.7	67.6	0.0	2.7
40 - 44 歳		45.5	51.5	0.0	3.0
45 - 49 歳		37.0	63.0	0.0	0.0
50 歳 以上		(65.7)	34.3	0.0	0.0

ックス)、ハンドバッグという格好に尽きている。

けれども男の教師の場合、世代によって好みのスタイルにズレも見られる。20代のヤング教師ほど、ブレザー・ネクタイ派(44%)である。それに対し、年輩教師ほど、スーツにネクタイのオーソドックスなスタイルに代表される(50歳以上=71%)ものである。

ところで教師の世界には、ある意味での“服装の哲学”というようなものが存在してきたように思う。つまり、たとえノーネクタイで服装がヨレヨレだとしても、若さと教育への情熱こそがすべてだという考え方である。むしろ服装などに全然かまわないで、若い時はヨレヨレの服に魅力さえ感じるような面があ

った。これまでのデータに、さらにマイカー通勤派が高校教師の過半数の55%という実態を重ね合わせてみると、教師はあまりにスマートになりすぎていないだろうか、という印象をぬぐいさることができない。

経験の浅い若い教師と練達の熟年教師が、まったく同じスタイル、同じしぐさで、生徒に接したり、指導にあたるということはない。若い教師には若い教師なりの仕方、年輩の教師には年輩の教師なりのやり方があるはずである。けれども教師から、ある意味での“泥くささ”が消えて、スマートな高校教師が増大するとすれば、学校の中にもどのような雰囲気を生み出していくことになるのであろうか。

### 3. 職員室での話題

学校がいきいきと、活気にあふれているか、あるいは生気を失ったように、無力感に支配されているか、それは職員室の雰囲気にあらわれてくる。職員室こそは、教室ではうかがい知れない教師の本来の“顔”がのぞかれる場であるかもしれない。

#### (1) どんな話題が多いのか

図V-3は、職員室でどのような話題が多くとりあげられているかを尋ねた結果である。ベスト5は、「よく+少し」話題になるで、

- |                   |       |
|-------------------|-------|
| ①HRや教科で受けもちの生徒のこと | ……98% |
| ②教科の進め方や指導技術など    | ……90% |
| ③時事問題について         | ……88% |
| ④趣味やスポーツなどのこと     | ……87% |

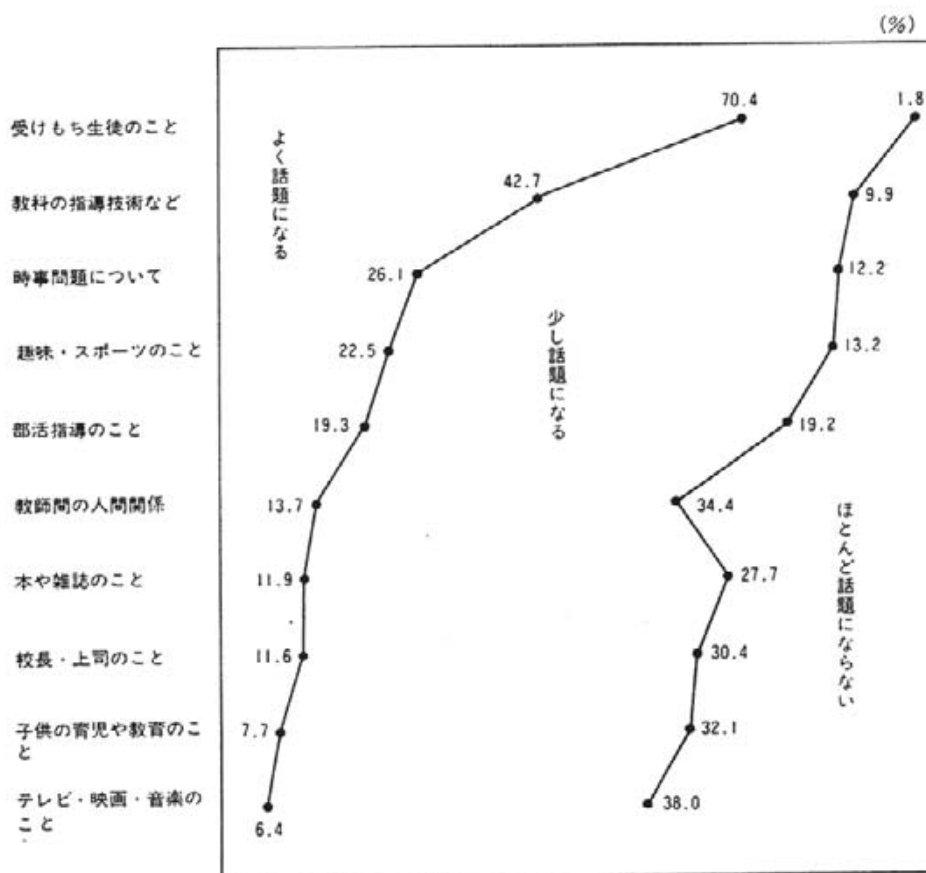
⑤部活動やその指導のこと ……81%

となっている。

「よく話題になる」ことだけで見ても、上位は、「受けもちの生徒のこと(70%)」、「教科指導技術など(43%)」の二つが、とびぬけている。つまり、生徒の指導や授業のやり方などがまず話題の中心になるのである。

これに対して、読書やテレビ・映画・音楽などの一般教養的な話題は意外に少ない(「読書」12%、「教養番組や映画・音楽などのこと」6%)。さらに、「教師間の人間関係」14%や「校長・上司」12%に至っては、なかなかホンネの話題としては出にくいようである。言うならば、職員室は、タテマエ的な話題に終始していると言ってよいであろう。

図 V-3 職員室での日頃の話題



## (2) 話題と担当教科のタイプ

さて、教師の仕事の「専門性」からすれば、それぞれの教師が身につけている技量や担当教科によって、かかえている悩みや関心事にも違いがある。そこで、担当する教科によって、職員室での話題の内容に、どのような差が見られるのかを調べたものが、表 V-7 であり、かなりの差がみられる。

それは次のように要約できよう。

- ①教科の指導技術に熱心だが、時事問題のような社会的話題にうとい数学教師。
- ②その逆に、時事問題には大きな関心を持つが、教科の指導技術の話題に消極的な

のが社会科教師。

- ③どんな話題にも幅広くのってくるのが国語教師。
- ④英語や理科の教師は何かと話題には中層的で、個性がうすい。
- ⑤やはり個性的なのは主要5教科以外の教師。体育教師は、文字通りスポーツや部活指導の話題に、極端なまで熱心である。

こうして見ると、同じ教師といっても、担当教科によってかなり持ち味の違いが見られる。本来教師の仕事は、こうしたそれぞれの“味”がミックスされて、えも言われぬ“妙味”になるとき、大きな教育力となるのであろう。

表V-7 職員室の話題×教科

(%)

教科 \ 話題	受けもち生徒	教科の指導技術	時事問題	趣味・スポーツ	部活指導	教師間の人間関係	読書	校長・上司	子供の育児教育	映画・音楽
英語	69.6	44.9	21.7	20.9	16.0	13.9	11.3	12.3	7.6	6.3
国語	74.1	43.7	30.4	24.5	20.1	14.2	14.6	12.0	8.9	7.5
数学	67.3	46.5	19.0	21.0	15.7	10.8	8.8	9.6	7.0	3.5
社会	71.2	37.5	38.8	21.8	20.5	15.6	12.7	14.2	6.5	7.1
理科	67.5	44.3	21.2	20.6	21.1	13.4	12.6	6.9	7.3	6.1
芸術・家庭	76.5	29.9	23.9	22.4	22.4	17.9	13.4	13.4	7.5	13.4
体育	73.2	42.9	21.4	41.8	46.4	12.5	8.9	16.1	10.7	7.1

注) 数字はよく話題になる割合: ○は各話題のトップ

### (3)世代間の話題

若さや体力で生徒を圧倒してきた世代の教師が、ふと「この頃生徒がわからない」と自嘲的にもらすことがある。けれども、教師と生徒の「断絶」が口にされる以前に、教師相互の間ではどうであろうか。教育の現場では、教師集団としてのまとまりがもっと尊重されてよい。この意味で職員室での日頃のなげない会話を通して、教師同士が互いに啓発し合ったり、教師集団としての一体感や共通感覚を、土壌として獲得しておくことが求められる。

表V-8はこうした職員室での日頃の話題が年齢によって違いが出てくるのか、出てこないのかを調べたものである。

話題の頻度が、教師の年齢に左右されない話題としては、「HRや教科で受けもちの生徒のこと」、「時事問題」、「趣味やスポーツなど」、「部活指導」、「本や雑誌」、「映

画・音楽」などがあげられる。

それに対して、教師の年齢差によって頻度に差の見られる項目をあげると、「教科の進め方や指導技術」、「教師間の人間関係」、「校長や上司など」、「家族や子ども・育児や教育」がある。

この中でも「教科の進め方や指導技術」などの話題は、年輩教師ほど若い教師より話題にする割合は高い。これは経験の浅い若い教師の方が、授業実践の試行錯誤や悩みなどを話題にしやすいであろう。またベテランの教師以上に授業研究に熱心なのではという予想を裏切る結果である。むしろ若い教師は、どちらかというと、年輩の教師に比べ同僚や校長、上司などとの人間関係について話題にすることの方が多いうのである。子どもの育児や教育については、目下子育てと取り組んでいる中間世代が必然的に多く、子育て以前と以後の世代は当然に話題としては少ない。

表 V - 8 職員室での日頃の話題×年齢

(%)

年齢	受けもちの生徒のこと			教科の指導技術			時事問題について			趣味・スポーツなど			部活指導		
	よく話題になる	少し話題になる	ほとんど話題にならない	よく	少し	ほとんど	よく	少し	ほとんど	よく	少し	ほとんど	よく	少し	ほとんど
30歳以下	72.5	26.3	1.2	36.7	48.3	15.0	29.4	55.0	15.6	26.9	57.8	15.3	19.9	59.9	20.2
31-34歳	70.8	25.0	4.2	31.3	53.3	15.4	23.3	60.0	16.7	25.9	61.5	12.6	16.7	57.4	25.9
35-39歳	72.5	26.4	1.1	35.8	54.8	9.4	27.0	66.5	6.5	23.5	65.5	11.0	15.9	64.0	20.1
40-44歳	69.6	29.2	1.2	46.1	46.5	7.4	24.6	64.9	10.5	21.0	68.2	10.8	20.1	62.2	17.7
45-49歳	65.5	32.7	1.8	43.6	47.7	8.7	23.7	61.7	14.6	19.2	66.7	14.1	19.9	64.5	15.6
50歳以上	71.5	26.7	1.8	56.1	38.4	5.5	27.9	61.8	10.3	19.7	65.3	15.0	21.9	60.7	17.4
年齢	教師間の人間関係			本や雑誌について			校長・上司など			子供の育児・教育			教養番組や映画・音楽		
	よく	少し	ほとんど	よく	少し	ほとんど	よく	少し	ほとんど	よく	少し	ほとんど	よく	少し	ほとんど
30歳以下	20.8	48.6	30.6	14.8	54.4	30.8	16.0	57.9	30.1	7.4	51.5	41.1	9.2	55.2	35.6
31-34歳	18.4	51.5	30.1	9.2	57.5	33.3	12.9	60.8	26.3	10.8	62.1	27.1	4.6	57.9	37.5
35-39歳	14.0	53.4	32.6	12.9	64.8	22.3	16.3	61.0	22.7	10.6	67.1	22.3	7.2	59.5	33.3
40-44歳	11.1	52.7	36.2	11.4	61.4	27.2	9.6	61.7	28.7	6.9	65.6	27.4	5.4	54.2	40.4
45-49歳	9.8	53.8	36.4	12.1	59.3	28.6	7.6	59.1	33.3	4.3	61.3	34.4	6.2	53.1	40.7
50歳以上	9.5	51.7	38.8	10.8	64.1	25.1	8.4	53.9	37.7	7.1	56.4	36.5	5.8	54.5	39.7

#### (4)話題の学校差

これまで職員室の話題を教科や世代差で見えてきたが、もう一つ、角度を変えて見てみよう。表V-9は職員室での日頃の話題を勤務校の共通一次受験者の割合とクロスさせたものである。つまり学校差によって、高校教師の職員室での話題の持ち方の違いを探ろうとしたものである。まず全体を通してみると、

「よく話題になる」に着目して、進学校（ほぼ全員受験）と、非進学校（2割以下）との間の有意な差を見ると、「教科の指導技術」（進学校55%>非進学校35%）、「校長・上司など」（進学校8%<非進学校15%）に差があらわれている。

まず全般的に非進学校では、各年代とも「教科の指導技術」に関して進学校の数値を下まわっており、いかに話題として低いものであ

表V-9 職員室での日頃の話題×学校ランク

学校ランク		話題の内容	(%)									
			受けもち生徒のこと	教科の指導技術	時事問題	趣味・スポーツなど	部活指導	教師間の人間関係	本や雑誌について	校長・上司など	家族や子どもの育児や教育	映画や音楽のこと
進学校	2割以下		73.6	34.5	27.6	24.8	21.2	(15.5)	11.9	(14.6)	8.6	6.5
	3割以下		67.8	43.4	24.6	19.4	20.8	(12.7)	12.4	(11.1)	7.0	7.8
	半割以下		74.1	(53.4)	22.4	23.3	17.4	(17.4)	11.9	(10.0)	8.2	3.7
	7割以下		63.4	(52.4)	28.6	18.1	14.7	8.6	10.5	6.4	4.5	4.9
	9割以上		66.4	(54.5)	24.6	23.9	16.4	8.2	13.4	7.6	8.3	10.4
非進学校												

注) 数字はよく話題になる割合

るかが再確認される。その上に輪をかけるように、若い教師は年輩の教師よりも「教科の指導技術」をめぐる話題に積極的に参加する割合は低い。とりわけ30代前半の教師の落ち込みようは極端である。(50歳以上=44%>

31歳～34歳=22%)(表V-10)。

その反面において、職場の人間関係についての話題は、明らかに年輩の教師より若い教師の方が積極的である傾向がはっきりしている。

表V-10 非進学校での職員室の話題×年齢

年 齢	話 題		
	教科の進め方や 指導技術など	教師間の人間関係	校長・上司など
30 歳 以 下	30.2	19.6	15.3
31 ～ 34 歳	22.3	24.8	18.5
35 ～ 39 歳	32.0	17.7	21.8
40 ～ 44 歳	39.1	11.0	11.8
45 ～ 49 歳	40.7	7.5	11.2
50 歳 以 上	44.2	9.9	9.1

## 4. 余暇生活

さて、次に高校教師の余暇生活について見てみよう。余暇とは、もちろん労働に対置されるものである。「私」的生活領域において必要労働から完全に解放された余暇時間の過ごし方は、休息や気晴らし、また自己啓発の活動等、どのように過ごすかによって、それ自身一つのライフスタイルを示唆している。本章の最初でとりあげた高校教師の1日の構成時間を見ても、帰宅後の主要な余暇時間を、テレビ視聴、教材研究、読書に、平均各1時間を費やして過ごしている。それでは、高校教師の余暇生活は、どのようなライフスタイル

ルをつくり出しているのだろうか。

### (1)高校教師と読書

まず教師と読書の結びつきは、職業柄切っても切り離せない関係にある。すなわち教師の知的情報源は“書物”であり、絶えずそこから最新の情報を補給する必要があるからである。1日の余暇時間の中で、読書にかかるのは、平均1時間。そこで、ふだんどのような本や雑誌を読んでいるのか、読書傾向を探ることによって、教師の職業意識の裏側をのぞいてみよう。



表V-11に見る高校教師全体の読書傾向としては、①一般教養書 ②教育・専門書(誌) ③娯楽雑誌 ④マンガ誌、という順序になる。マンガをよく読んでいる者は5%と、ごく僅かであり、全体としてみると、職業柄を反映した知的嗜好の読書傾向がうかがえる。今日の隆盛を誇る高校生のマンガ文化も、このデータを見る限り、高校教師の読書の範疇に入ってきていないようである。

はじめに教師の知的情報源は書物であるとのべたが、そうであるならば教育・専門書(誌)はまさにその補給源の機能を果たさねばならない。ところが驚くべきことには、高校教師の中でそのような書籍が読まれているのは半数以下であった(「教育・専門書」47%、月刊「教育・専門誌」36%)。

この点をさらに掘りさげて、世代間の差を見たのが表V-11である。

これから明らかなのは、年齢が若い教師ほど、教育・専門書(誌)から離れていく傾向があり、20代の若い教師たちに至っては、その7割は、言うならば私的「補給源」を持っていないことになる。

その一方、若い教師は娯楽雑誌やマンガ誌に対しては、他の世代の教師よりはるかに敏感であり、このあたりに高校教師の従来の読書傾向が少しずつ変わり始めている気配がうかがえる。

しかし、そうは言っても伝統的な「書物」中心の読書傾向が基本的に変ってきているわけではないのは見てきた通りである。

表V-11 ふだんよく読んでいる本や雑誌×年齢

	(%)					
	1	2	3	4	5	6
	小説・時事・教養	教育書・専門書	月刊の教育誌 専門研究誌	時事・教養 などの週刊誌	芸能・ファッション 趣味などの 週刊誌	マンガ
全 体	63.1	47.1	36.1	35.3	24.0	4.8
30 歳 以下	67.8	48.6	29.5	33.4	35.9	17.3
31 - 34 歳	62.7	42.3	32.4	31.5	24.1	5.8
35 - 39 歳	68.7	47.9	36.6	30.9	21.9	3.8
40 ~ 44 歳	61.3	44.9	34.2	34.5	22.6	0.9
45 ~ 49 歳	59.5	45.9	43.4	37.6	20.4	0.7
50 歳 以上	59.7	50.8	40.0	41.0	19.0	0.5

注) 数字はよく読んでいる割合: 複数回答

## (2) 高校教師と余暇活動

では、学校を離れて、教師は実際にどのような余暇活動をしているのだろうか。日頃している活動や学習について尋ねた結果が、表V-12である。

全体的な傾向としては、とりたてて何もしていない教師の方が多いわけであるが、一応、「よくしている」に着目すると、①趣味的活動(42%)、②スポーツ(39%)、③音楽・美術・文学(30%)がベスト3ということになる。これらに共通していることは、個人的なレベルでの自己回復の余暇行動であり、趣味・娯楽・スポーツといういわゆるレジャー本位の行為である。教師として意識される学習活動は低調であり(16%)、まして地域青少年活動へのボランティアや、市民活動を通して、自己の余暇行動を社会的再生産活動に関係づける視点は欠落している。印象としては、積極的な余暇行動を展開しているというほどではないが、私生活主義の枠内でせめて

自己の趣味だけはだいじにして、適度の運動もこなして体力の保持を心がけている、というところだろうか。

それでは、高校の教師という「専門性」と余暇活動はどの程度結びつき、対応しているのだろうか。図V-4は、教師の担当教科と余暇活動のクロス集計の結果を図示したものである。

要約して言えば、体育科教師とスポーツ(88%)、芸術科教師と音楽、美術、文学系(64%)の活動である。この2教科の教師の余暇行動には、自己の専門領域と結びついた顕著な特徴が見られる。同様に国語科教師にも、およそその専門性から推測できる文学活動に従事する割合が比較的目立つ。理科や数学科教師は半数近くが何らかの趣味活動をもっているが、ここでそれを特定することはむろん困難である。英語や社会科教師となると、これとひと口で言える余暇行動が見当たらない。余暇行動の選択率を度外視して、強いて言うならば、英語科教師と学習活動(おそらくこ

表V-12 余暇行動

余暇行動	尺 度	
	よくしている	していない
スポーツ(サッカー、ゴルフ、野球、水泳など)	38.5	61.5
音楽、美術、文学に関する活動	30.1	69.9
趣味的活動(狩猟、園芸、写真、手芸など)	42.2	57.8
学習活動(英会話、マイコンなど)	16.1	83.9
海外旅行や国内の旅	14.1	85.9
市民活動、住民運動、自治会活動	7.9	92.1
子ども会やスポーツ少年団の世話	4.4	95.6

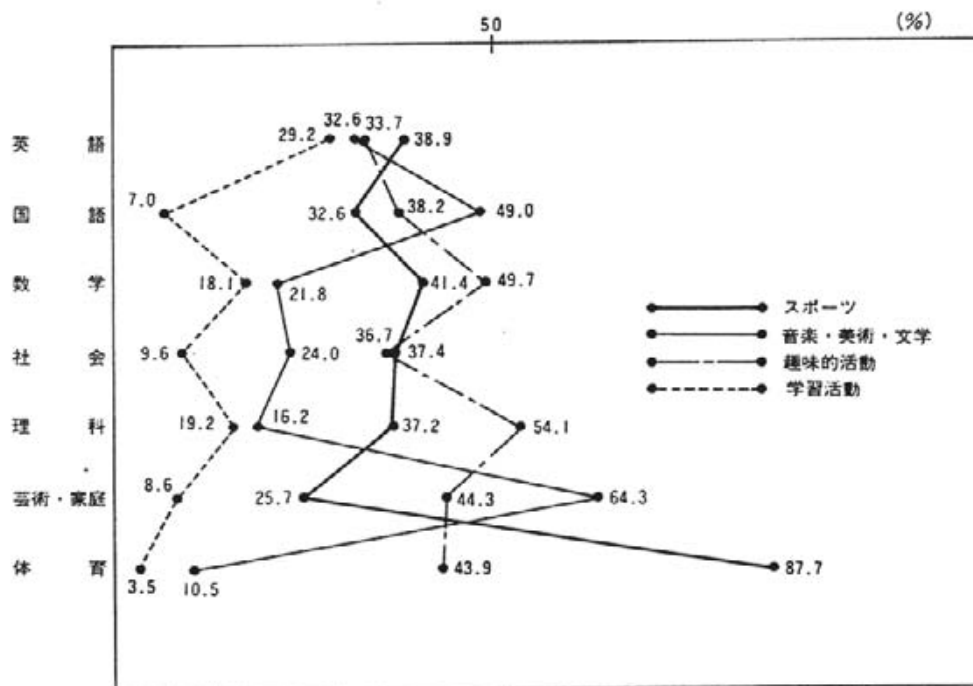
れは英会話と推定されるが)、の対応であろうか。

以上をさらにつきつめれば、技能教科の教師はやはり余暇行動の選択においても、自己の「専門性」との結びつきが強いということが言える。

なお、余暇行動の世代差のクロス集計を試

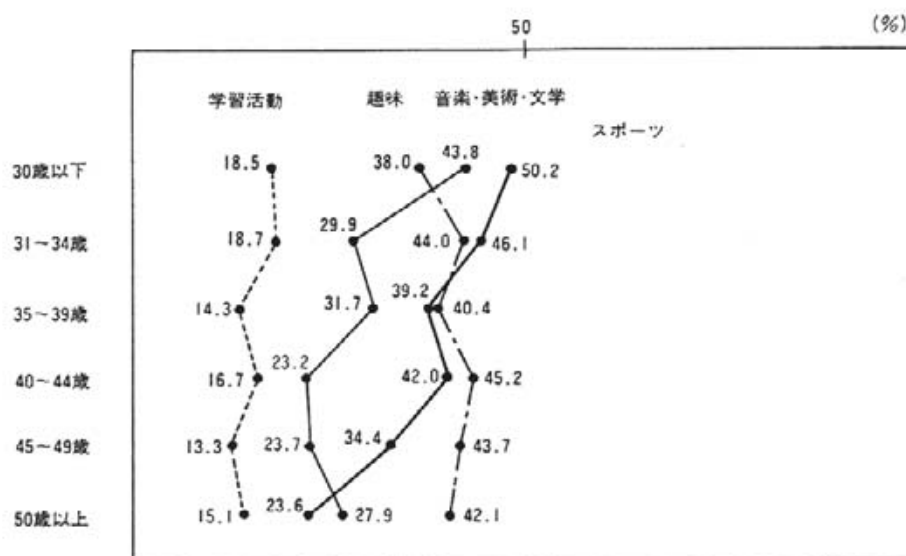
みたが、図V-5にみるように、スポーツや音楽、美術、文学系の活動は、若い教師は熱心であるが、年齢の上昇とともに減少傾向にある。その他の趣味的活動や学習活動については、年齢による差は、ほとんど認められなかった。

図V-4 余暇行動×担当教科



注) 数字は「よくしている」割合

図 V - 5 余暇行動×年齢



注) 数字は「よくしている」割合

## 5. まとめ

ひと通りの分析を終えて、結果を概観すると、高校教師の世代間によって、教職への構えのスタイルの違いに気づかされる。

スマートなファッションに身をつつんで、不似合いな教育書より、マンガや娯楽雑誌を手に出動してくる若い教師。それとは対照的に、オーソドックスなスタイルで、コツコツと授業に向かう年輩の教師。こうした2種の典型的な高校教師が職員室で話題にすることと言えば、年輩の教師は相変わらず授業や専門にうんちくを傾け、他方若い教師は同僚や上司の話題に耳をそば立て、なんとなく遅くまで学校に居残っている、こんなイメージが描かれる。さらにつけ加えるならば、30代の教師は、授業や教師の仕事にも慣れ、はりつめた20代の若い教師からすると、精神的に弛緩しているようだ。

退職するぎりぎりの瞬間まで確実に生徒と

直接向き合わねばならない教職は、年齢が加わるごとに教師にとって、精神的にも体力的にもきついものになっていく。経験の浅い若い教師が教壇に立ち、また担任として生徒と向き合うことは、もちろん厳しいことである。だが、若さやスポーツで生徒にひけをとることもなく、いっしょに、時には先頭を切ってやれるうちはよい。けれども年とともに生徒との対応に気力や体力がともなわなくなったとき、別の意味での教師としての厳しさと悲哀とがつきまとう。高校生の変わりように困惑し、とまどっているのは若い教師よりも、やはり年輩の教師である。とりわけいわゆる“底辺校”といわれる非進学校では、満足に授業すら成立しがたい悲惨ともよべる状況が作り出されているのが現実である。

教育現場で先輩教師がよく言うことに、“若い時は徹底して苦勞をしておけ”ということ

がある。若い時代を教師としてどう送ったかが、その後の教師生活を支え、決めていくことになるという意味である。調査結果からは、教科や授業、「私」的生活においても、そのような徹底してやり抜くといった手ごたえは、若い教師のデータからは、伝わってこなかったのである。

